

女子学生における靴の適合性と足部愁訴の関連性

The relationship between appropriateness of footwear and foot complaints among female university students

1K04A0022-2

伊藤 朋香

指導教員

主査 鳥居俊先生

副査 福林徹先生

緒言

靴が原因のひとつとなって発生する愁訴は数多くある。自称サイズと足長実寸の不一致が足部の障害につながることを示唆する先行研究には、江川ら(2006)がラグビー選手に対して行った調査がある。この調査で得られた傾向が、様々な靴を履用する日常生活での現状に当てはまるか検討することは有意義であると考ええる。

目的

女子学生の日常生活における靴の適合性と、足部の愁訴の関連性を明らかにすることとする。

方法

対象は現在高度な運動習慣のない女子大学生、大学院生 81 名とし、以下の 2 つの調査・計測を行った。

1. 質問紙調査

靴の自称サイズに関する設問、現在の足部の愁訴に関する設問など、5 項目 12 問である。

2. 足部形態計測

左右の足長、足幅、足囲を、非荷重位・荷重位にて計測を行った。そのうち足長と足囲を JIS S 5037「靴のサイズ」に当てはめ、足部の実寸に最も近い靴のサイズを算出し、適正サイズとした。質問紙で回答された自称サイズから足長実寸を減じた値を「足長サイズの一致度」とした。差が小さいほど「一致度が高い」、大きいほど「一致度が低い」と表現した。足長に対する足幅の相対比を「足幅/足長比」とした。

結果

81 名全員が自分の履いている靴の足長サイズを回答したのに対し、足囲サイズを回答したのは 13 名であった。荷重位における足長サイズの一致度を「一致度高」、「一致度低」の 2 群に分類し、愁訴別、部位別の発生件数、発生愁訴の総数について群間の差を検討したが、有意な傾向は認められなかった。荷重位における適正足囲サイズを、「C」、「D~EE」、「EEE 以上」の 3 群に分類し、愁訴別、部位別の発生件数、発生愁訴の総数について群間の差を検討したところ、発生愁訴の総数において、「EEE 以上」が、「C」、「D~EE」を有意に上回った(図 1)。荷重位における足幅/足長比を「小さい」、「大きい」の 2 群に分類し、群間で差の検討を行ったところ、「小さい」群の荷

重位における足長サイズの一致度が有意に高かった。また、両者の相関関係を検討したところ、中程度の正の相関関係が認められた。

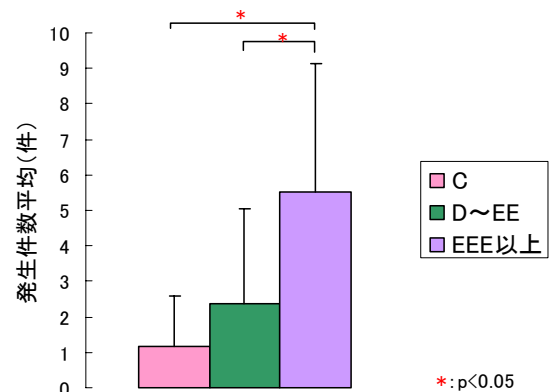


図 1. 足囲サイズ別にみる愁訴総数の平均

考察

同じ足長サイズの靴でも、捨て寸の大きさやデザイン、素材の違いにより、履用感が異なってくる。そのため、サイズのみに着目した検討では、意味のある傾向が得られにくかったと考えられる。足囲サイズについては、足囲サイズの大きいものが実際よりも小さい足囲サイズの靴を履いているために、特に足趾への圧迫が強まり、愁訴が増える傾向が認められたのではないかと考えられる。履き心地、その他の要素含め、多くの選択肢から自分の足に合ったものが選ぶことができるよう、足長だけではなく、足囲についても幅広いサイズ展開を期待したい。また、足囲サイズが表記してある婦人靴を見る機会が少ないため、全ての靴に足長とともに足囲サイズも表記されること、消費者自身が足囲サイズへの理解・関心を高め、靴選びに役立てることが望まれる。

結語

本研究では、以下の 3 点が明らかになった。

1. 足長については大多数の者が自分のサイズを認識しているが、足囲サイズを把握している者はわずかである。
2. 荷重位における足長サイズの一致度と愁訴数との関連性はなかった。
3. 荷重位において足囲サイズが大きい者は、小さい者に比べて足部の愁訴を有意に多く訴えた。